

大隅潔 『横綱大鵬 晩節のかがやき』

大隅 功*

横綱大鵬は、1940年に南樺太（現在のロシア・サハリン）で、ウクライナ出身の白系ロシア人（ロシア革命に反対して国外に亡命したロシア人のことであり、当時南樺太は日本領）である父と北海道出身の日本人である母との間に三男として生まれた。その後1956年に二所ノ関部屋に入門し、1971年夏場所で引退するまでに幕内最高優勝32回（白鵬に抜かれるまでは史上最多の優勝回数）の昭和を代表する大横綱である。

現役引退後より福祉活動を開始し、その結果、日本赤十字表彰や世界人道主義賞を受賞しており、また、30年以上にわたり日本赤十字社に血液運搬車「大鵬号」を送り続けたことなどの功績で、2009年に相撲界初の文化功労者に選ばれている。

本書は大鵬が文化功労者に選ばれたのを機に、スポーツ新聞の記者をしていた著者（現東京相撲記者クラブ会友）が、大鵬の半生や大鵬から相撲界への苦言や提言などを記して2010年に刊行されている。なお大鵬は2013年に死去した後、国民栄誉賞を受賞している。

刊行当時及びその後も相撲界は不祥事などで世間を騒がせ、大鵬が相撲界改革の担い手として大きな期待を寄せていた貴乃花親方においては、大騒動の末に日本相撲協会を突然退職したことは記憶に新しい。

横綱朝青龍が様々な問題行動を起こして引退を余儀なくされたのも刊行当時であるため、本書の副題は『『横綱の品格』とはなにか』となっている。

* おおすみ・いさお／明治大学 学術・社会連携部 中央図書館事務室

これに関連して興味深い標語や言葉が本書に記されているので、ここでいくつか紹介をする。

- ・ 力士5訓（1974年に、力士の情操教育として当時の日本相撲協会理事長が提唱した標語）

「ハイという素直な心」

「すみませんという反省の心」

「おかげ様でという謙虚な心」

「私がしますという奉仕の心」

「ありがとうという感謝の心」

- ・ 人を育てるのは「人」
- ・ 自戒と自律。それが「横綱力」

これらの標語や言葉は全て、我々一般の社会人にも当てはまると思っ
ている。

力士5訓は、今となっては昭和感満載で時代遅れと指摘される標語か
もしれないが、令和の新入職員研修で取り上げてもよさそうな標語であり、
また結婚式のスピーチなどで新婚夫婦に捧げる標語としても適しているの
ではないか。実際に私も、似たような標語を人生の先輩方から新入職員時
代及び新婚当時にいただいた。

「人を育てるのは『人』」などは人事企画課が喜びそうな言葉ではあるが、
確かにその通りだろうと思う。私は人事異動で中央図書館事務室に配属と
なった最初の1か月は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う最初の緊急
事態宣言終了直後ということもあり、事務室内の職員は交代で週2日在宅
勤務であった。配属直後に在宅勤務をしていた際、様々なソーシャルメ
ディアが発達してきているとはいえ、やはり対面で色々と教えていただき、
逆に自分が知っている情報や知識等があれば対面で直接伝えるというコミュ
ニケーションを通じて、人はお互いに少しずつ成長をしていくのだろうと
強く感じた。

「自戒と自律。それが『横綱力』」とはまさしく「横綱の品格」を表した
言葉である。通常相撲の番付（力士の格付け）は、本場所で負け越すか休

場すると下がり、勝ち越すと上がる仕組みになっている。横綱は相撲の番付においては最高位であり、本場所で負け越したり休場したとしても横綱の地位から落ちることはなく（ただし横綱審議委員会から苦言や勧告はある）、あとは自ら決断して土俵から身を引く（引退）かどうかである。

一方、我々明大職員はどうだろうか。資格としては、書記補→書記→副参事→参事という順番で昇格し、昇格が途中で止まることはあるが降格することはない。また、管理職に着任後は管理職待遇から降格することはない。入職後から退職までの間、現在有している資格などから降格することがないのであれば、資格が最高位でなかったとしても、実は明大職員は全員「横綱」なのではないかと個人的には思っている。

私がまだ若いころは、先輩職員から色々と叱咤激励や指導をしていただくことがあったが、齢五十を過ぎるとそのような機会はほとんどないため、自戒と自律という言葉を常に肝に銘じなければいけない、と本書を読んであらためて思った。

横綱昇進伝達式における新横綱の口上のようにはあるが、今後はこれらの標語や言葉を常に忘れずに、日々の業務に対して真摯に取り組んでいきたい。